

綱引き

綱引きは、旧暦6月の稲作行事との関連で、沖縄各地で広範に分布している習俗の1つとされています。綱引きには、農作物の豊作に対する感謝と来期の祈願、村人の健康や繁栄を祈願する意味が込められています。このほかに雨乞い、年占い、厄払い、娯楽、大漁祈願など多岐にわたり、地域的特色が反映されているようです。

村内の綱引き

1980(昭和55)年に発刊された『恩納村誌』では、瀬良垣にも1897(明治30)年ごろまで綱引きがあり、また安富祖にもあったと記されていますが、いずれも明確な情報や資料は見つかっていません。

『恩納字誌』では「かつて恩納でも1918、9(大正7、8)年頃まで、旧暦6月25日の六月ウマチーに綱引きが行われていた。集落を東と西に分け、東側が後村渠(雄綱)、西側が前村渠(雌綱)、場所は上間屋前のムラ内を東西に通る宿道で、メーモーイ(綱引き前に踊る)や、ガーエー(応援合戦)で盛り上がった。旧暦6月23日にワラビジナーが保仁屋(屋号)前で行われ、24日にニーセイジナ、25日の本番にウージナーが行われた。」とあり、東綱が雄、西が雌で、東綱(雄)が勝つと豊年につながると伝えられていたようですが、今は行われていません。

現在、村内で綱引きが行われているのは谷茶と富着のみです。



谷茶綱引き(1990年ごろ)

谷茶の綱引き

今回の村史だよりでは、平成16年3月発刊の『沖縄の綱引き習俗調査報告書』(沖縄県文化財調査報告書第143集)に谷茶の綱引きについて報告がありましたのでご紹介します。

谷茶では近世琉球のころ、中国との貿易が盛んに行われ、2隻の船が貿易船として使用されていました。綱で船を引き寄せて泊める作業が綱引きの起源になったといわれ、谷茶では豊作、豊漁祈願のほか、中国へ渡る人々の航海安全も祈ったといえます。

かつては旧暦6月25日のチナフィチエー(綱引き)の1か月前頃から、青年会の男性が各家から藁一束を集めはじめ、藁がないときは近くの村から購入することもあったようです。集められた藁は「シンダカリ(東側:雄綱)」は



谷茶の綱制作の様子(1990年ごろ)

ミージョーグワ(屋号)、
「メンダカリ(西側:雌綱)」
はトウンチ(屋号)という
旧家に分けられ、双方の
綱打ちは秘密裏に行われ
ました。綱を海水に浸して
締めりを良くしたり、蔓の
根っこを芯に入れて強化を
図るなどの工夫も見られ、
不義をしていないかの偵察
まであったそうです。

現在は稲作が行われていないため綱は作らず、ロープで代用し、4本くらいの綱をひとまとめにしたものを利用しています。